百合子賞　佳作　受賞作品

求め続けて

郡山市立郡山第七中学校
鈴木　伶奈

生活

鳥はさえずり
風は全てを包み込む
雨は地に降り立ち土へと還る
木は天に向かって枝を伸ばし　大地に向かって根をおろす

人は何かを求め　走り続ける
季節は移り変わり　全てに生死を贈る

全ては自然の営みの中に

存在

誰かが向こうで
私を呼んでいる
私は振り返って見たが　誰もいない
それは私の空耳だったのか
寂しくなる

私は誰かに何かを与えてもらいたい
でもそれは何かは分からない
私は誰かを求めてさ迷い続ける

ヒト

ヒトは日々せわしなく駆けまわる
しかし時には止まって過去へ思いをはせ　分からぬ未来に希望を
　抱く
迷っている時には何度も自問自答し　ようやく答えを見つける
大きい壁が立ちはだかったら　遠回りしたり砕いて正面突破した
　りする
何事にもたくさんの道がある
だけれど　ヒトには数本の道しか見えていない
命は生まれては消えていく
それがこの世の理
泣いている暇は無いの

周りが闇ならば自分で光を見つけ　一歩ずつ歩んで行こう

刻

あなたは私が小さかった頃から　ずっとそばで見守ってくれていた
あなたは私と一緒にみちを歩んでくれる
あなたは私が年老いても変わらず動き続けていく
あなたは楽しい時も悲しい時もよりそってくれる
私はあなたがいないと少し寂しく感じる

だけど　あなたは私が追いかけても　私の指をすり抜けていく
私は「とき」という流れの中で走り続けるの

うそかまことか

世界には「うそ」という言葉がある
その裏には何もない
ただの貼り紙
それでもヒトはその言葉を使ってしまう
ただ自分を守るためだけに

世界には「まこと」という言葉がある
その裏には大きな事実が秘められている
それは真実の扉
ヒトは真実を求めるが　行きつくのは一握り

あなたはどちらを使うのでしょうか

（指導教諭／米　川　美　枝）

《作品の意図》

全ての詩のテーマは様々なものになりますが、一貫して共通しているのが作品名にもあるように「求め続けて」という思いです。人という生き物について考えた時、ただただ今ある現状をどうにかしようとして手を伸ばし続ける姿勢が浮かび、自分のイメージとマッチしたので書いてみることにしました。

《作品の寸評》

一篇一篇の詩の対象は様々だが、自己の周りの様々な事物や事象を深く見つめる姿勢は一貫していて、五篇の詩を貫く強い想いが伝わってくる作品である。

「生活」という詩では、普遍であり絶対である自然の営みの中で、「人間」である自分が生かされているという発見、そして「何かを求めて　走り続ける」のだという覚悟さえ伺える。「存在」では、不安や見えない未来に対し、目の前にいない誰かを求め続ける、中学生の私の等身大の姿が描かれている。「ヒト」では、これまでの人生の中での経験や発見から、中三なりの真実や道理、悟りと思われるものを詩として表現しようとしている。「周りが闇ならば自分で光を見つけ、一歩ずつ歩んで行こう」という最終行に、覚悟と希望を感じる。

全篇を通して表現されているのは「求め続ける」人として、今を生きている筆者の真摯な想いであり、姿である。何年か後に掌にしっかりと握られているものが確かにあるだろうことが予想され、それが何だったか尋ねてみたい気がする。

（審査員／吉　井　美　香）